The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本占領下の北京における日・朝文学者の様相 : 中薗英助の出会った金史良
Author(s)	彭, 雨新
Citation	アジア太平洋論叢. 2022, 24, p. 135-146
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95084
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アジア太平洋論叢　24 号 (2022)
Bulletin of Asia-Pacific Studies vol. XXIV pp.135 -146.

日本占領下の北京における日・朝文学者の様相
—中薗英助の出会った金史良—

Scholar of Japanese and Korean Literature in Beijing during the Occupation Period: Nakazono Eisuke's Writings of Kim Sa-ryang and His Korean Experience

彭　雨新*
PENG　Yuxin

Abstract

This article focuses on the experience of a short stay in Beijing by the Korean writer Kim Sa-ryang(1914-1950?)on his way to escape from Japan and head for the Taihang Mountain region of China to participate in the Anti-Japanese revolution in 1945.

According to the records of the Japanese writer Nakazono Eisuke, in May 1945, Kim Sa-ryang, who was about to leave the Japanese-occupied area, chanced to meet Nakazono, who was then a reporter of the Beijing Japanese newspaper East Asian News, at the Beijing Hotel. The two drank freely and talked deeply all night, which left an indelible mark in Nakazono's wartime memory and literary career. Kim Sa-ryang was a very important and special Korean writer in wartime Japan and his Japanese novel In the Light (1939) was once nominated for the Akutagawa Prize. He went to China's liberated areas to participate in the Anti-Japanese revolution in 1945, and reportedly died in the Korean War in 1950. Although Kim Sa-ryang and Nakazono Eisuke only talked for one night in Beijing, the latter had been repeatedly writing about the former in his novels, essays and memoirs from the early postwar period to the 2000s. Therefore, this article will comprehensively review the writings of Kim Sa-ryang by Nakazono Eisuke, analyze the image of Kim Sa-ryang described by Nakazono Eisuke by making reference to the relevant discussions of Korean literature researchers and literary critics Ahn Woosik and Paek Cheol, and then explore the heterogeneous "Korean experience" obtained by Nakazono Eisuke as a witness of the "All Black Age" in the history of literature in enemy-occupied Beijing.

Keywords: Nakazono Eisuke, Kim Sa-ryang, Paek Cheol, Beijing in the occupation period

Ⅰ　はじめに：中薗英助が北京で出会った金史良と戦後の作品群

作家の中薗英助（1920-2002）は 1938 年から北京で「放浪語学生」の生活を送り、北京現地の日本語新聞『東亜新報』の学芸記者を務めつつ、在北京の日本人文芸団体燕京文学社の同人として文学活動も行なっていた。終戦後の 1946 年（当時 26 歳）に引き揚げるまで、日本占領下の北京で 8 年間の青春時代を過ごした。中薗の 8 年間の北京生活、とりわけ彼が友好を深めた日中作家・文化人、そして、彼が見続け、参加もしてきた占領期の北京文壇は、戦後の中薗の執筆活動における最も大きいテーマだと言える。

中薗は北京時代において、新聞記者と青年作家という二つの身分を持っていたため、当時の北京文壇への参与度は高かったと思われる。また、彼自身は北京時代で交友があった中国人作家に深い親しみを抱いている一方で、戦争に関する日本・日本人の責任を強く感じていたため、戦後、彼が北京時代を回想・反省する作品群は、当時の北京文壇の実相をある程度反映しており、とりわけ作中における豊富な細部描写は、資料の極めて少ない占領期北京文壇を研究する間接的な資料となっている。例えば、日中両国における袁犀、陸柏年、劉雪庵など戦時中の文化人に関する研究、そして木山英雄の周作人研究(1)においても、中薗英助が書いたものを一種の資料として使っており、中薗作品における資料的な価値はすでに認められている。

* 北京第二外国語大学日本語学院・専任講師

中薗英助が書いた北京時代に関する作品の中で、朝鮮作家金史良(キム　サリャン)に関するものは特別な存在だと言える。金史良（1914－1950?）は朝鮮の作家である。1914 年に平壌に生まれ、1932 年、内地に留学し東京帝国大学を卒業する。1939 年、金史良は北京を訪問し、日本に戻った後に日本語で「光の中に」（1939）を創作する。1940 年、「光の中に」が芥川賞候補となったため、彼は日本文壇に注目され、その後の二年間で日本語の作品を数多く創作した。1941～44 年、日本の植民地であった朝鮮に対する政策が段々厳しくなる中、金史良は 1944 年に日本語での執筆活動を止め、1945 年北京から中国共産党の解放地区に脱出し、朝鮮独立同盟に参加する。解放後は北朝鮮で作家活動をつづけ、1950 年に朝鮮戦争に従軍して死亡したとされている。中薗英助と金史良の出会いは、日本占領末期の 1945 年 5 月下旬、金史良が八路軍の抗日解放区へ脱出する直前、北京に滞在していた時期である。中薗は、当時朝鮮語新聞『毎日新報』（毎日申報）の北京支局長であった白鉄の紹介で、金史良と北京飯店で会うことができ、三人で夜を徹して飲み明かし、忘れられぬ北京の一夜を過ごしたのである。

興味深いことに、北京で金史良と酒を交わしたこの一夜について、中薗英助は終戦直後から 2000 年代までの半世紀に渡って、小説、エッセー、回想録の中で繰り返し書き続けており、現時点で集めている資料から見ると、以下の表 1 でまとめているように合計 10 篇が認められる。

表 1　中薗英助が金史良について言及している作品

	時期	題名	初出	ジャンル
1	1950 年	黒い自由	『近代文学』1950 年 6 月号	短編小説
2	1954 年	金史良作品集	『近代文学』1954 年 10 月号	評論
3	1964 年	夜よシンバルをうち鳴らせ	『日本読書新聞』1964-1965 年	長編小説
4	1974 年	韓国ペンクラブ会長 白鉄氏への手紙	『中央公論』1974 年 10 月号	手紙
5	1975 年	中・ソ体験そして脱アメリカ体験	『第三文明』1975 年 1 月号	エッセー
6	1978 年	私の朝鮮経験－再説・金史良との夜	『三千里』14 号（1978 年 5 月 1 日）	回想文
7	1988 年	北京銀座の夜はふけて	『コットン』1988 年 12 月号	回想文
8	1988 年	外地文学青年の偏食	『第三文明』1988 年 10 月号	回想文
9	1992 年	北京飯店旧館にて	単行本（筑摩書房, 1992 年）	長編小説
10	2001 年	遠人近交録（第二話）金史良との一夜	『世界』第 685 号（2001 年 3 月）	回想文

一方、管見の限り、金史良側には中薗英助との出会いに関する記録はないと思われる。また、日中韓における金史良研究の中では、安宇植（1972）『金史良：その抵抗の生涯』の中で中薗との面会が言及され、郭炯德が 2017 年「東アジア植民主義と文学研究会」第 3 回年度大会及び「台湾／満洲／朝鮮の植民主義と文化交渉」国際シンポジウムの発言要旨の参考文献の中で中薗の『北京飯店旧館にて』を挙げている程度で、徐昌源（2000）、金在湧（2014）など金史良と中国、金史良の脱出問題を扱う研究では、脱出前夜の北京における金史良と中薗の交流についてはほとんど注目されていなかった。しかし、中薗が金史良とのたった一夜の面会をこれほど大量に描いたことは、当時 24 歳の若き中薗にとって金史良との出会いがそれだけ貴重な経験であったことを示している。したがって、本稿ではこの日本占領末期の北京で生じた日・朝文学者の出会いに注目し、中薗英助が書いた金史良関係の作品を整理した上で、「北京の一夜」の実相を考察し、中薗が金史良をいかに描き、そして、どのように理解していたのかを考えたい。

II　最初の金史良描写――小説「黒い自由」（1950）について

本章では、まず、中薗英助の最初の金史良描写である小説「黒い自由」を分析する。「黒い自

由」は雑誌『近代文学』1950 年 6 月号で発表した短編小説で、中薗の戦後処女作「烙印」を同誌同年 2 月号で発表して間も無くの戦後最初期の作品である。後に『定本 彷徨のとき――中薗英助・初期中国連作小説集』（批評社、1993 年）に収録され、本稿には同書のテクストを用いた。

「烙印」と「黒い自由」という二作が、「野間宏に認められ、これより中国体験に基づく連作を書き続ける」(2)と年譜に書いているように、「黒い自由」は日本占領下の中国体験という中薗文学における大きな主題を切り開いた作品の一つだとも言える。この小説には、金史良が実名で登場し、また作品の後半では、全篇の約半分くらいの分量で金史良との夜を大いに取り上げていることに注目したい。

「黒い自由」の主人公である K 日報社文化部新聞記者の天野時造（モデル：中薗英助）は、日本軍司令部の特務工作員として、中国の文化人や知識階級の動向を蒐集して報告する、という「真相と称して真実を自由自在に語りうる奇妙な『自由』」(3)を手に入れた。それはすなわち帝国権力の享有側しか持つことのできない「黒い言論の自由」である。小説の前半は、天野が日本軍司令部の指令を受けた当日の午後、P 大学の学生楊紹年、楊の友人である女学生の陳錦麗とレストラン「吉士林」で会い、林房雄、小林秀雄、吉川幸次郎のことを指していると推測できる名前の日本知識人の中国に対する「福音伝道」や、実名で登場した岡野進（野坂参三、1892-1993）の延安亡命などについて語り合う場面である。小説の後半は、当日の夜から翌日の朝にかけて、北京飯店で、朝鮮の M 新報北京支局長・白哲、朝鮮人従軍作家・金史良と会ったことを描いている。徹夜で酒を飲んでいるうちに、天野は白哲から金史良が中共地区へ脱走する計画を知る。これらの人物と交渉する中で、天野は「この自分は何というチャチなスパイ。犬奴。それも醜怪極る逆間諜とでも言うべきであるか」（中薗 1993：146）と思い、「劣等感」（中薗 1993：158）を覚える。小説の最後、この帝国の特権、権力者側しか享受できない「黒い自由」の汚さに圧倒され、日本軍司令部の指令状を燃やし、妓楼に逃げこむ天野は、「日本、だんだん負けてくわね」（中薗 1993：158）という妓女たちの会話を聞いても、彼女たちの歌声が自分たち日本人の挽歌のように聞こえる。

この小説について、とりわけ「黒い自由」という言葉の意味について、立石伯は以下のように分析している。

> 自由を求めつづけていた天野時造にとって『黒い自由』に描出された自由ほど皮肉なものはない。（中略）こうした黒い自由を描くことで、中薗英助はおそらく自由の二つの面を明白にしたかったのに相違ない。一つは、人間の根源的な内的な自由のあり方である。二つは、自由の反語的な側面を強調することによって、侵略・被侵略の関係を個々人の具体的な内面的な関係として俎上にのせるという点である。後者の点のみを敷衍しておけば、盧溝橋事件の忠霊塔に導いてその意味を暗に考えるよう促した『日本人嫌い』のスン、天野に徹底的な劣等感を覚えさせた『黒い自由』の楊、陳、金などの存在が、日本人、中国人、朝鮮人などにおける自由・不自由の様態を端的に浮彫りにしていたのである。いわば、不自由を描出することによって、逆説的に自由を追求したことにほかならない 。
>
> （立石伯「ある季節と城」『定本 彷徨のとき――中薗英助・初期中国連作小説集』p.320）

また、中国体験を題材にしている中薗の他の小説と比べ、「黒い自由」には比較的露骨に「侵略者」（中薗 1993：134）、「反戦抗日」（中薗 1993：135）、「日本帝国主義」（中薗 1993：159）といった言葉が使われ、終戦直後の作品における日本の戦争責任を暴き出す意図が読み取れる。

1. 金史良の登場と「白哲」

では、「黒い自由」における金史良に関する描写を詳しく分析したい。まず、金史良の登場は、以下のように描かれている。

> 公寓から五分とはからない「北京飯店」の、回転ドアを入ったところに、朝鮮の M 新報北京支局長をやっている白哲が人待顔に煙草をくゆらしていた。

「やあ。遅いなあ」
彼は、抱き込むようにしてぼくを迎えた。
ロビイの一隅にあるスタンド・バアへ行くと、白がその夜紹介してくれることになっていた従軍作家金史良は、すでに一人でグラスをなめていた。彼は、華北の前線にいる朝鮮人志願兵のルポルタージュを書くために、二、三日前京城からやって来たばかりであった。
「やあ。はじめまして」
切れ長の目の縁を染めた金史良は、右手をあげ、その手で照れるように長髪をかき上げた。
（中略）
スタンドに片肘ついた小肥りの白哲が身をゆすり上げるようにして金史良の肩を叩いた。あの朝鮮人細民の凄惨な生活に筆を入れたただ一人の民族作家としての定評があり、一ころは執筆禁止を喰っていたとも言われる彼が、あまりにういういしい少年のような男なのに驚いて、ぼくは、しばらく口をつぐんでいた。

（中薗 1993：143　下線は筆者）

引用部に書かれているように、主人公に金史良を紹介してくれたのは、「朝鮮の M 新報北京支局長をやっている白哲」である。この白哲という人物のモデルは、韓国の文芸評論家白鉄（ペク　チョル、本名白世哲、1908－1985）である。白鉄は 1931 年に渡日し、東京高等師範学校を卒業した。一時朝鮮プロレタリア芸術同盟（KAPF：Korea Artista Proleta Federatio）に属した左翼文芸評論家で、1935 年に治安維持法による投獄ののちに転向する。戦時中、白鉄は韓国語新聞『毎日新報』（『毎日申報』）の文化部部長、北京特派員になり、「在北京の記者団から『朝鮮大使』などと呼ばれた、当時京城唯一の諺文(ハングル)紙毎日申報（金史良は朝鮮語小説『海への歌』連載中）の北京支局長」(4)である。戦後、白鉄は韓国の中央大学教授、国際ペンクラブ韓国本部委員長を勤め、朝鮮最初の近代文学通史『朝鮮新文学思潮史』などの著作がある。
実名で登場する金史良とは異なり、白哲という人物の設定は一見、前述の林房雄、小林秀雄、吉川幸次郎の場合(5)と似通った、モデルの本名に近い名前を使い、本名を隠しながらも読者に容易に連想させるものとなっている。これは中薗が日本文壇の有名人やまだ健在のモデルを描く時よく使う方法であり、他の作品にも見られる。しかし、意外なことに「黒い自由」には、おそらく金史良と同様に、白哲も実名登場させたつもりであった。中薗のエッセーによると、「ここに登場させた金史良への紹介者である白哲と、日本ではあまりにも有名な時の人として知られるようになった白鉄氏とが私の中で結びつくには、しかし戦後の長い長い歳月を要することになる」(6)ということである。戦時中の旧知にその名を確かめた時、旧知の誤った記憶を取り入れ、中薗の内部に定着したらしい。戦後、韓国の新聞に文化界の名士として顔写真が載っているのを見た時、ようやく白哲と白鉄とが重なり得たと述べている。ゆえに、1950 年当初、中薗が「黒い自由」を執筆した頃には、白哲という人物の設定は金史良と同様に実名での登場のつもりだったはずである。金史良、白哲を同時に実名で登場させることには、虚構の作品の中に歴史的「事実」そのものを嵌め込もうとする意図が読み取れる。
次いで、中薗の金史良に対する外見描写に注目する。前の引用にあるように、金史良は「切れ長の目の縁を染めた金史良は、右手をあげ、その手で照れるように長髪をかき上げた」、「ういういしい少年のような男」である。中薗が金史良について書いた最初のエッセー「金史良作品集」（『近代文学』1954 年 10 月号）の中でも、金史良と初対面した印象に関して、長髪、細めた酔眼、子供っぽい表情、筋骨質の長身など似た描写が見られる(7)。よって、「黒い自由」における金史良の外見描写は、中薗の本当の印象に基づいていると判断できる。また、その後の他の作品もほとんどこの外見描写を維持しており、中薗文学における金史良像（外見）には統一性が見られる。

2. 「黒い自由」における金史良に関する 4 つの重要場面

「黒い自由」の後半部は、主に金史良と酒を交わす一夜をめぐって展開している。とりわけ、以下の四つの重要な場面が描かれている。まず、天野が北京飯店のロビイで初対面の金史良に、

自分が勤めている日本語新聞『K 日報』にも文章を書いてほしいという要請をするが、金史良がそれを断る場面である。

> 「それに僕は、この頃日本語でモノを書くのが、とてもおっくうでしてね」
> お互いを、あくまで日本人どうしの親しいものとすることで話を進めよう、と努めていたぼくは、その意識をピシリと鞭うたれたようだ。
>
> （中薗 1993：144　傍点は原文）

主人公天野はこの初対面の状況において、金史良に「日本人どうし」としての「親しい」感情を自然に抱いているが、金史良は日本語が「おっくう」、つまり日本語を使いたくない、ひいては自分は日本人というアイデンティティーを認めたくないという意識を表している。天野は初対面の金史良との意識のギャップに「鞭うたれたよう」なのであろう。

次の場面は、占領地である北京では戦争が直接に見られないという天野の発言に、金史良が朝鮮人として戦争を強く意識し、反論している場面である。金史良は以下のような発言をする。

> 「戦争はどこだって、戦争じゃありませんか。そうですよ。もう至るところ、戦争なんですからね。僕たち朝鮮人は、その深淵の前で、いつも当惑気に佇んでいる。そして後ろから、ウーンと突き飛ばされる。いやそれよりも、自分で飛び込んでしまった方が早いくらいですよ」
> せめてここではと、金史良は嘲けるように笑い、グラスを高く捧げた。
>
> （中薗 1993：145　下線は筆者）

この場面では、金史良は日本人である天野に向かって、わざわざ「僕たち朝鮮人」というアイデンティティーを強調し、天野に反論するのである。圧迫されている民族として場所などと関係なく、いつも戦争を切実に感じている。また、戦争の深淵に突き飛ばされるというより、「自分で飛び込んでしまった方が早い」というセリフは、金史良が前線に脱走し、自ら抗日の陣営に参加したい気持ちを暗示している。

この発言の後、金史良と白哲はしばらく早口の朝鮮語で会話を交わし、天野は無論その内容が解らない。天野はこの朝鮮語で話し合っている二人の朝鮮人を見て「酷烈な距離感を感じる」（中薗 1993：146）と同時に、宗主国国民である日本人として朝鮮人に対する「民族的偏見」（中薗 1993：146）と「優越感」（中薗 1993：146） を感じるはずであるが、天野の場合は逆で、彼は日本人としての「劣等感」（中薗 1993：146）を覚えている。その後、三人は北京飯店から出て、場所を変えて正陽楼の焼羊肉（ジンギスカン）を食べに行く。場所を移すこの間に、天野は小説冒頭部に出ている日本軍司令部の特別工作員が自分たちを監視していることに気づきはじめる。

第三の場面は、三人が正陽楼で白乾児酒を呑みながら、天野と金史良がオスマン帝国に対するアラビア民衆の反乱を支援した軍人「英国人ロレンス」（トーマス・エドワード・ロレンス、Thomas Edward Lawrence、 1888-1935）と「ヒューマニズム」（Humanism）について語る場面である。アラビアで回教徒工作を行いながら、自ら砂漠の反乱者になった英国人ロレンスのことを天野は好きになった。彼の砂漠の遊牧民族への愛情がヒューマニズムだと考えたからである。しかし、金史良は愛情だけで民族問題は片付かないと主張し、「ロレンスが、すっかりアラブになりきって民族独立を助けようとした最終的な理想はともかくして、大戦中に遊牧民族を懐柔して戦争に駆り立てた点の功罪もハッキリさせなくちゃね。要するに、彼は大英帝国の選民で、そして何よりも帝国に奉仕した」（中薗 1993：151）と語っている。このようなロレンスと異なり、「僕は日本人じゃないんだ。大東亜民族協同体とかいうのをつくるための、ヒューマニズムの持ち合わせはないんだ」（中薗 1993：152）と金史良は露骨に反日的言論を発している。この発言を聞いた天野は、「金史良に対して、激しくこみ上げてくる異様な憎悪を覚えた。が、その憎悪の念は、たちまち返り矢のように、まっすぐ自分自身に突き刺さってくるのだ。（中略）どこまでいっても、自分が日本人であることの、不思議な憤ろしさが、ひたひたと胸を搏った」（中薗

1993：153）と痛感した。それは天野の自己への嫌悪感、とりわけ自分が日本人であるというアイデンティティーに対する反感が、金史良の話によって強化されていると言える。また、この場面における金史良との会話によって、天野は「黒い自由」の権利を象徴する軍の「指令書」をストーブに投げて燃やすのである。

最後の場面は、天野が白哲から金史良の脱出計画を聞く時である。金史良と会話している中、どんどん強化され、エスカレートしていく自己嫌悪感が天野を追い詰め、彼は白幹児酒に溺れ、自己麻痺と現実逃避の道を選んでいる。すっかり飲みすぎた天野が一片残った意識の力で白哲に別れを告げる際、白哲は彼を引き止めるために、天野の耳元で「これは、君にだけだが。今日いっしょに呑んだのも縁なんだ。金史良は、ね。前線の朝鮮人志願兵を見たあと、向うへ行っちまうつもりなんだ。向うで仕事をするらしいんだ」（中薗 1993：155）と金史良の脱出計画を話す。この情報を聞いた天野は、従軍作家金史良が共産党地区に脱走する行動の重さを自覚し、驚き、緊張、恐怖すら感じている中で、「自分は、ともかくもある地点まで到達した。そうだ。まるで仲間のように、白哲も、金史良さえも自分を偶してくれようとする」（中薗 1993：156）と述懐している。つまり、天野から見ると、三人が過ごした一夜の中で、危険な言論を話し合うだけでなく、金史良の脱出計画さえ語ったことは、白哲、金史良が今ここで自分に対する信頼感を示していることになる。三人はある意味で互いに「知遇」を得ている。天野は白哲から脱出という重大情報を聞いた後も、自ら金史良と別れの挨拶をせず、白哲に「お元気で」（中薗 1993：156）と伝えさせるだけで帰ってしまう。天野が自分から別れを告げなかった理由について、小説にははっきりとは書かれていない。金史良の脱出計画を知った以上、軍部の監視下にある自分たちの集会が、これから「逃亡者」になる者にとってどれほど危険なのかをより一層実感したからかもしれない。正陽楼から出た後、天野は何となく上着のポケットに軍部からもらった交通費を見つけ、妓楼に入り込んで、酒色の中で自分を麻痺させたいと思う。北京の西郊空港で日本軍の飛行機がアメリカに撃ち落とされ、日本は間も無く敗戦するという妓女たちの私語を聞いた天野は、遠くから聞こえる唱大鼓(チャンダアグウ)(8)の歌も、敗北が近づいている日本への挽歌のように聞こえてくる。天野は軍部からもらった「特別工作宣伝員身分証」を頭に被って妓女と遊び、小説全篇は日本帝国とその権力に対する深刻な風刺と絶望の中で終わるのである。

小説後半における金史良に関する描写では、彼の日本語に対する反感から彼の戦争に対する意識、民族意識の主張まで、日本帝国の皇民としてのアイデンティティーを認めず、朝鮮人のアイデンティティーと朝鮮民族の独立を強く求めるという彼の人物像が少しずつ強化され、最終的に彼の脱出計画につながるのである。金史良が自分の朝鮮人のアイデンティティーを徐々に強調していく中、天野は自己嫌悪感、そして日本帝国に対する憎悪までもが掻き立てられる。主人公は金史良との出会いや会話を通して、逃避し続けてきた戦争と罪悪感が麻痺していた自分とに向き合わなければならず、罪悪感の中で深い自己反省を完成したのである。

III　他の小説における金史良像

短編小説『黒い自由』は中薗英助の最初の金史良を描く作品であり、金史良との出会いが物語の主体となっており、作品のテーマもここから引き出されている。そのほか、中薗の長編小説『夜よシンバルをうち鳴らせ』（1964）、『北京飯店旧館にて』（1992）の中でも、金史良について独立した章で描かれている。

長編小説『夜よシンバルをうち鳴らせ』は、中薗が学芸記者として『東亜新報』で働いていた経験に基づき、華北日報の記者である潮の視点から日本占領下の北京を描いている。1964 年から 1965 年『日本読書新聞』に連載され、1967 年に現文社より単行本が、1986 年に福武書店より福武文庫版が出版されている。本稿には福武文庫版をテクストとして用いた。

小説には周作人、沈啓无、許広平、管翼賢、陸柏年など、淪陥下北京の文化人が実名で登場しており、袁犀、久米正雄、林房雄など実在の人物をモデルとした人物も多く見られ、新聞記者の目から見る淪陥下北京文壇の群像が描かれている。『北京飯店旧館にて』など回想録式の小説と比べ、『夜よシンバルをうち鳴らせ』にはサスペンス的な要素がうかがえるが、中薗の中国体験

小説シリーズに共通する史実に基づく場面が多く、実際に『東亜新報』の記事からも対応する記録を見つけることができる。『夜よシンバルをうち鳴らせ』の第十一章「逆徒従軍」には、金史良、「白哲」が再び描かれており、以下はその金史良が登場する場面である。

（前略）そこには、もう一人朝鮮人がかけて、ウィスキー・グラスをかかえこんでいた。
　色の浅黒い、三十そこそこの青年である。背が高くてひきしまり、鞭のようにしなやかな体躯は、サッカー選手か何かを思わせた。白哲が、彼を紹介してこういった。
「小説家の金史良くんです。朝鮮人志願兵のいる前線へ従軍するんで、北支へやってきたんですよ。ちょうどいい機会だから、今日は三人で徹底的にのみましょう」
　金史良は細い切長な眼を、洋酒の飾り棚からわたしの方に流してきて、かるく会釈した。鋭い、光る刃物が空虚からまいおりてくるような衝撃が、わたしの頬を硬くさせた。
（中薗英助『夜よシンバルをうち鳴らせ』「第十一章　逆徒従軍」1986：301）

白哲が北京飯店のホールで潮に金史良を紹介すること、そして小説における金史良の外見描写は『黒い自由』とほぼ一致し、中薗が小説の中で再び金史良との記憶を新たにしたと言える。金史良に日本語新聞の原稿を書いてほしいという依頼も、『夜よシンバルをうち鳴らせ』の中で再現されるが、ここにおける潮の依頼の理由は、「光の中に」、「天馬」など金史良がこれまで発表した日本語作品に対する彼の愛読と感動である。そして、小説の中では実際に、「親方コブセ」（『新潮』1942 年 1 月号）という金史良が日本で発表した最後の作品の中の詩を引用している。

別れ火となり
焼くはわが心
涙ぞ雨とならば
火も消さんに
溜息風となり
心一入燃ゆ

（中薗 1986：303）

『夜よシンバルをうち鳴らせ』は、『黒い自由』のような主人公と金史良の対話式の会話で物語を推進する形式を使っていない。その代わりに、金史良と白哲がいくつかの場面においてスピードの速い朝鮮語で議論するシーンを描いた。主人公の潮は、朝鮮語にたまに混じっている日本語の単語から二人の会話と気持ちを推測するしかない。その後、白哲から、二人が朝鮮語で朝鮮の問題を話したのだという説明があり、それは特に朝鮮語学会弾圧事件(9)と、金史良が白哲の勤める京城日日(10)という朝鮮語新聞で朝鮮語の文章を連載しはじめたことなどの話題であったことを教えられた。潮が孤立している状態において、二人の朝鮮知識人が自分たちの言葉で、自分たちの言語問題、民族問題をめぐる討論をしているのを傍観する。つまり、「黒い自由」の書き方とは異なり、このような主人公の不可解と疎外感を強調する書き方を通して、金史良、白哲が異民族であることを前面に出し、傍観者の視点から彼らの朝鮮人としてのアイデンティティーと反日精神を表現している。また、現実の中薗英助と同様に、金史良と出会った夜には、潮は最後まで彼の脱出計画を知らないのである。
『北京飯店旧館にて』（1992）は中薗英助をモデルとした主人公が 40 年後北京を再び訪れ、懐かしい街の風景を眺めながら、自分が日本占領期の北京で放浪語学生として日中の友人とともに経験した過去を回想している作品である。小説の中心的章節である「第 3 話　北京飯店旧館にて」の中で、主人公は北京飯店旧館の玄関に立って、金史良のことを思い出している。

　或る夜わたしは、そこに駐車していた一台のタクシーのうす暗い後部座席にいた。すると、ふいにふわりとしたチマ、チョゴリを着た若い女性が、金史良といっしょに乗り込んできた。衣ずれの音とともにいい匂いが車内いっぱいにひろがった。（中略）北京の記者団仲間から朝鮮私設大使などと呼ばれていた朝鮮語新聞特派員の白鉄に誘われて、『光の中に』という作品

が芥川賞候補になった小説家の金史良といっしょに、ホテルのバーでウィスキーを呑んだあと、どこか前門外あたりへ呑み直そうとして出かけるところだった。（中略）

「ぼくはもう、日本語でものを書くのがいやになりましたね」

金史良は、顴骨の張った面に一筋切れこんだような細い眼をキラキラ光らせながら、随筆原稿の依頼を皮肉っぽく断ってきた。彼が執筆禁止処分の身の上だったことを、それまで知らなかったのだ。

（中薗英助『北京飯店旧館にて』「第 3 話 北京飯店旧館にて」1992：50-51）

『北京飯店旧館にて』における金史良の外見描写、新聞原稿の依頼、金史良がそれを断る場面は、これまでの作品と同じ筆調を維持している。また、『夜よシンバルをうち鳴らせ』と同様に、『北京飯店旧館にて』の主人公も北京に居留している日本人文学青年として、金史良の作品を大量に読んでいたため、初対面の金史良に「懐かしい兄貴分」（中薗 1992：51）のような親近感を抱く。そして、同じく最後まで金史良の脱出を知らないまま章が終わるのである。しかし、戦後初期の「黒い自由」、『夜よシンバルをうち鳴らせ』と明らかに異なる箇所が二つある。一つ目は、この 1992 年の回想録式の小説には、白哲という人物の名前がすでに白鉄に直っていることである。二つ目は、チマ・チョゴリを着ている朝鮮人女性という新しい人物の登場である。これらの変化は、1970 年代以降、中薗英助が金史良に関する記憶を再確認したことと大きく関わ っており、これについては次節で検討する。

IV　創作と「真実」の狭間――「北京の一夜」に対する再確認と再発見

表 1 に示しているように、1970 年前後、中薗の小説でもエッセーでも金史良に関する描写に変化が生じたのである。その中で最も大きい理由は以下の二つである。一つは、1970 年、在日の朝鮮文学研究者である安宇植（アン ウシク、1932-2010）が金史良に関する研究を日本で発表したことである。もう一つは、戦後の中薗英助と白鉄の手紙のやり取りである。

1. 安宇植の考証

安宇植「金史良・抵抗の生涯」は 1970 年 11 月から 1971 年 8 月まで雑誌『文学』に連載され、1972 年岩波書店から単行本『金史良：その抵抗の生涯』として発行された。安宇植は金史良に対する考察の中で、1945 年の金史良と中薗英助の面会に言及している。また、中薗が小説の中で描いた金史良の日本語創作に対する拒絶反応を引用し、その言葉へのこだわりは彼の「民族的・芸術的抵抗」を持続させるためだと解釈している(11)。中薗と金史良の「北京の一夜」について、安宇植は具体的に以下の二つの事実を考証したのである。

一つ目は、二人が出会った時期である。中薗は長い間、自分と金史良との出会いは 1944 年の初夏の出来事だと思っていたが、安宇植は『評伝金史良』（1983）の年表の中で「（1945 年 5 月：筆者）二十六日、華北朝鮮独立同盟につがなる Y 大人（李永善）に北京飯店で邂逅する。このころ中薗英助に会う。二十九日…」(12)と書いている。「このころ」という書き方が曖昧で、具体的な日付が不明であることを示している。しかし、1945 年 5 月 26 日から 29 日の間であることは推測できる。中薗も 1970 年以降の作品群では、1945 年 5 月と記憶違いを訂正している。また、なぜ中薗が 1944 年と間違えたかについて、彼は回想文「私の朝鮮経験――再説・金史良との夜」(13)の中で、以下の二つの理由を述べている。一つ目は、中薗が新聞社の学芸部記者として金史良に原稿を頼んだという記憶が鮮明で、彼が学芸部に所属していた時期は 1944 年までだからである。二つ目は、中薗の印象の中で、金史良の脱出行は日本敗戦前のわずか二、三ヶ月前ではなく、もっと早い時期の出来事のはずだからである。しかし、安宇植の考察を読んだ後、中薗は自分は 1945 年に「外交（政治・社会）部へ替えられている。しかし、よくよく思い出してみると、名目上は兼務ということで学芸部の籍を残されていたのだから、金史良と会った折に原稿を頼んだとしても不思議ではなかったのである」（中薗 1978：239）と解釈している。

安宇植が考証した二つ目の事実は、『北京飯店旧館にて』（1992）に登場する朝鮮人女性の身分についてである。中薗の記憶の中では、当日の夜、三人が北京飯店から出て木炭自動車で前

門外の料理店に行く途中、ふいにふわりとした白黒二色のチマ・チョゴリを着た若い女性が金史良と一緒に車に乗り込んできた。女性は途中で車から降りたので、中薗は途中まで同じ車に乗っただけで、彼女と話した記憶もないし、彼女が誰なのかも知らなかった。印象が浅すぎるせいで、「黒い自由」（1950）、『夜よシンバルをうち鳴らせ』（1967）などの初期作品には彼女に対する描写がなかったのかもしれない。しかし、安宇植の考察を通して、中薗は初めてこの女性が「在支朝鮮出身学徒兵慰問団」の一員で、女流詩人の盧天命（ノ・ジョンミョン、1912-1957）であることを理解した（中薗 1978：240）。この「北京の一夜」についての再認識は、1992 年の『北京飯店旧館にて』の中で、以下のように反映されている。

> だがいま、車をすてて北京飯店旧館のポーチの前に立ったとき、いの一番に想起したのは、解放区へ脱出する運命をえらんだ彼自身（筆者：金史良のこと）のことよりも、彼の伝言と平壌へ送り返す荷物をもって帰ろうとしていた盧天命の蝶のようにあでやかな姿だった。それはむかし採集した珍種の夜光を放つ鮮かな昆虫標本のように、まだ二十三、四だったわたしの脳髄の襞深く虫ピンで留められていたのかもしれない。
>
> （中薗 1992：52）

また、これと似たような描写は、中薗が金史良をめぐって書いた最後の回想文「遠人近交録（第二話）金史良との一夜」（『世界 』第 685 号、2001 年 3 月）にも見られる。

> それでもなお、あれから半世紀を経たいま、北京飯店から金史良、白鉄とともに前門外の正陽楼へ車で向う途中、金史良の私物を朝鮮へ持ち帰るべく同乗したチマ・チョゴリの女流詩人を、まるで珍種の美しい蝶の標本のように脳裡にとどめ得たあの北京の一夜を忘れることはできずにいる。
>
> （中薗英助「遠人近交録（第二話）金史良との一夜」2001：284）

安宇植の盧天命に対する同定を通して、中薗はあの夜の記憶を再構築することができ、1970 年代以降に書いたものでは、盧天命という人物の存在は金史良、白鉄と一体になっている。また、『北京飯店旧館にて』に描かれているように、金史良の荷物と精神を朝鮮に持って帰る使者として、盧天命のイメージは金史良自身の存在さえ超えて、主人公の中で輝いている。

2. 白鉄の手紙

安宇植の金史良研究とほぼ同時期、1974 年前後に行われた白鉄との手紙のやりとりも、中薗英助に「北京の一夜」に関する新情報をもたらした。二人の手紙は 1974、75 年の『中央公論』に掲載されているが、雑誌の紙幅の制限で白鉄の手紙は「割愛され」発表されている。中薗が白鉄との通信で気づいた新しい事実は以下の二つである。

一つは、白鉄によれば、金史良の北京滞在期間は半月ということである。そして、北京に滞在している間に、金史良が白鉄の斡旋で知り合いから千五百元を借りたこともあった（中薗 1978：241）。一方、前述の安宇植による金史良年譜では、1945 年 5 月 23 日北京飯店に投宿し、29 日午前、北京駅より南下する列車に乗り込み、31 日華北朝鮮独立同盟・朝鮮義勇軍と合流したのである(14)。中薗は「黒い自由」の中でも、金史良の北京滞在を「二、三日」と設定しているが、その事実関係はまだ不明であり、今後の課題にしたい。

もう一つは、白鉄が金史良の脱出行を事前には知らなかったと言い切っていることである（中薗 1978：242）。白鉄の主張について、中薗は信じられないところがあるが、白鉄の言うことを受け入れるしかない。もし白鉄が事前に何も知らなければ、金史良と朝鮮語で何を議論していたのだろうか。当時の金史良もまた、白鉄のことを全面的には信用していなかったのだろうか。あるいは、白鉄は当時から知っていたが、今になって知らなかったと言い張っているのかもしれない。白鉄のこのような主張とその言い方に対する中薗の不信感が理由かもしれないが、中薗の小説に、主人公がその場で金史良の脱出計画を聞いたという設定は、二度と出て来なかった。1950 年の「黒い自由」は敗戦直後の中薗が、日本占領末期の混乱の北京の夏において、金史良、

白鉄から信頼と知遇を得ているという幻像を描いたのである。

V　占領下の北京で生じる中薗の朝鮮経験：結びにかえて

中薗英助にとって、金史良という存在は二人が出会った前と後という二つの時期に分けて考えることができる。金史良本人と実際に出会う前、中薗は 8 年間北京に滞在している「外地文学青年」として彼の作品を愛読し、北京で彼の文章を通して、金史良という作家を理解し始めたのである。

> いずれにしろ、日本文学の主流からは遠く離れた文学青年であった。むしろ、戦時下の日本人文学はすでに死滅しつつあるのだという失望感に襲われながらも、在日朝鮮人文学の始祖ともいうべき金史良（『光の中に』ほか）らを、日本から送られてくる雑誌の中に探してむさぼり読んだものであった。
>
> （中薗英助「外地文学青年の偏食」『わが北京留恋の記』1994：76）

「戦時下の日本人文学はすでに死滅しつつある」と痛感していた中薗は、恐らく当時の燕京文学社の日本人文学青年たちと同様に、戦時中の日本国内を中心とする国策文学の風潮に絶望と不満を抱いていただろう。1942 年、北京で開かれた中日文学青年座談会において、中薗英助と同席した江崎磐太郎は彼らの同人誌『燕京文学』について、「我々は純文学の雑誌なので、ああいう宣伝ものに触れたらあまり良くないと思います」(15)と述べ、燕京文学社同人の政府当局に非協力的な姿勢を示し、政治宣伝と関わりたくないという意思を主張したのである。中薗の戦後の小説の中でも、日本文学報国会に派遣され、北京に来た林房雄、久米正雄などの文学者の国策協力に対する皮肉な描写が見られる。そのような戦時下の文壇において、中薗ら北京にいる日本人文学青年にとって金史良の作品が逆に精神的なよりどころとなっていたことは、『夜やシンバルをうち鳴らせ』、『北京飯店旧館にて』などの作品から読み取れる。

中薗が日本文壇から離れた異国において金史良の作品を大量に読むことができ、特別な愛着さえ抱いたのは、「日本占領地」という異質な空間にいたおかげでもあるだろう。1940 年代、日本占領下の北京には 10 万人以上の日本人居留民が暮らしており、日本の新聞、雑誌、書籍も比較的容易に手に入れることができた。だからこそ、中薗も金史良が日本国内で発表した作品をあまり間を置かずに読むことができたであろう。一方、占領地としての北京は、日本国内よりも言論の自由度が高く、検閲も比較的ゆるかったため(16)、中薗ら燕京文学社の同人は国策協力・文学報国の風潮に呑み込まれる運命を免れたのである。それゆえ、北京は中薗英助にとって、金史良と邂逅の地である前に、彼の金史良理解を築き上げることのできた空間でもあったと思われる。

また、白鉄が中薗に金史良を紹介した経緯についての記録は残されていないが、中薗の書き方から見ると、それは全くの偶然ではないはずである。中薗もまた、金史良の作品を愛読していたからこそ、この北京飯店の面会に赴いたのかもしれない。二人の面会は一度きりで、中薗は言語や民族の問題で疎外されていたと思われるが、愛読していた金史良の作品に対する理解と共感があったからこそ、この北京の一夜が中薗に実際以上の衝撃を与え、戦後の長い年月の間に、その記憶を何度も彼に回想させ、更新させ、中薗個人の金史良像を形成させたのである。そのことは結果として、資料が極めて少ない金史良研究にひとつの歴史的証言を提供し、脱出直前の金史良の行動と心理を考察する手がかりを示している。

朝鮮に住んだこともなく、朝鮮人との深い接触や交友を持たなかった中薗英助であるが、彼は戦後において朝鮮人と朝鮮問題に持続的に注目し、書き続けた。彼の朝鮮問題に関する代表作『在日朝鮮人――七〇年代日本の原点』（1970）のあとがきには、自分がそれとは知らぬまま、八路軍地区へ走る若い朝鮮人小説家金史良を見送ったことが書かれている(17)。別の文章の中で中薗は、自分が朝鮮問題に注目する理由について、「正直いって、戦後もかなり長い間、私が自分の不敏を承知で朝鮮および朝鮮人問題にかかわる文筆活動をしてきたのは、青春期の中国体験に対する代償行為のようなものだ、とひそかに思いなしてきたところがあった」(18)と述べている。自分の青春期の中国体験に対する代償行為というのは、日本の植民地支配に自分も加担したと認

識し、その罪滅ぼしをしたいということである。それは中薗が朝鮮問題に長い間注目し、執筆する原動力となったのである。1950 年の「黒い自由」における、金史良と向き合う中で主人公が自分の日本人としての罪悪感を反省するアプローチには、すでにこの「代償行為」の影が見られる。このような反省と贖罪の心理により、中薗は金史良個人を描いているうちに朝鮮問題全体に目を向けるようになり、それが戦後の彼の長い作家人生における無視できない一部になったのである。

付記　本稿は、北京第二外国語大学 2019 年度種子計画科学研究費「抗戦時期華北日本報刊整理与研究」（項目番号：21110009016）の研究成果の一部である。

注

(1) 木山英雄『周作人「対日協力」の顚末』（岩波書店、2004）。
(2) 中薗英助「中薗英助　年譜」『定本 彷徨のとき――中薗英助・初期中国連作小説集』1993：338。
(3) 立石伯「ある季節と城」『定本 彷徨のとき――中薗英助・初期中国連作小説集』1993：320。
(4) 「遠人近交録（第二話）金史良との一夜」『世界 』2001 年 3 月、第 685 号、278 頁。
(5) 中薗英助「黒い自由」(1950：134)には「昨年でした。森則男先生、それに大林秀雄先生や川下鉄太郎先生などにお会いできました」という描写がある。
(6) 中薗英助「私の朝鮮経験――再説・金史良との夜」『寄留者の歌』1988：240-241。
(7) 中薗英助「金史良作品集」『近代文学』1954：62。
(8) 中国の華北地方における口唱文芸「大鼓書」、あるいは「京韵大鼓」のことである。一般には清代初めに山東、河北の農村で形成された曲種と考えられ、北京・天津方面に伝えられ、京劇の唱法等を取り入れて京韵大鼓に発展したとされる。また、街頭を巡って京韵大鼓を演じる芸人は「唱大鼓的」と称された。
(9) 1942 年、朝鮮総督府によって朝鮮語学会の会員が逮捕された事件である。朝鮮総督府は、朝鮮語学会は民族精神を高揚させ独立運動を企てる秘密結社であるとし、治安維持法を適用して弾圧した。
(10) 《京城日日新聞》は 1920 年 7 月 1 日、朝鮮で創刊された日刊の植民地新聞である。1931 年から《朝鮮日日新聞》と改題した。
(11) 安宇植『金史良――その抵抗の生涯』1972：161。
(12) 安宇植『評伝金史良』1983：269。
(13) 初出『三千里』第 14 号「特集　歴史の中の日本と朝鮮」、1978 年 5 月 1 日。後に『寄留者の歌』（リブロポート、1988 年）に収録され、本稿には同書テクストを用いた。
(14)安宇植『評伝金史良』1983：268-269。
(15)江崎磐太郎の発言の中国語原文は「但我們是純文學雜誌，接觸那種宣傳文字總不大相宜」「中日文学青年座談會」『国民雑誌』（北京）1942 年 9 月号、21 頁。日本語訳は筆者。
(16) 日本占領下の北京における言論の自由度と検閲のゆるさについては、張泉『抗日戦争時期中国淪陥区的言説環境――以北京上海文学為中心』（『抗日戦争研究』2001 年第 1 期）などの研究に詳しく論述されている。例えば、1938 年から 1940 年の間に北京警察署に勤務し複数の映画館で書報検閲官を務めていた台湾人作家劉捷（1911-2004）の回想録によると、「映画の検閲は、主に抗日の場面や有色人種のシーンが有るか否かを確認した。新聞雑誌の検閲はとても楽で、禁止されたり、カットされたりした文章はほとんどなかった」（劉捷『我的慚悔録』九歌出版社　1998：96）とされている。それと比べて、谷崎潤一郎『細雪』（1943）は、女性たちの平穏で豊かな生活を描いただけで、「軟弱で戦争を傍観している」と軍部から反感を買い、発禁処分を受けたのである。
(17)中薗英助 『在日朝鮮人――七〇年代日本の原点』1970：284。
(18)中薗英助「私の朝鮮経験――再説・金史良との夜」『寄留者の歌』1988：244。

引用・参照文献

和文文献

安宇植　1970-1971「金史良・抵抗の生涯」『文学』（1970 年 11 月-1971 年 8 月連載）。
――　1972『金史良――その抵抗の生涯』岩波書店。
――　1983『評伝金史良』草風館。
金史良　1954「親方コブセ」金達寿（編）『金史良作品集』理論社、205-215 頁。（初出『新潮』1942 年 1 月号）。
木山英雄　2004『周作人「対日協力」の顚末　補注『北京苦住庵記』ならびに後日編』岩波書店。
徐昌源　2000「金史良と中国、そして在日朝鮮人――『光』を求める流離人」杉野要吉（編）『交争する中国文学と日本文学:淪陥下北京 1937-45』三元社、563-572 頁。
立石伯　1998『北京の光芒・中薗英助の世界』オリジン出版センター。
中薗英助　1993（初出『近代文学』1950 年 6 月号）「黒い自転車――『光』を求める流離人」『中薗英助・初期中国連作小説集』批評社、189-196 頁。
――　1975「私の昭和史 中･ソ体験そして脱アメリカ体験」『第三文明』第 167 号、64-71 頁。
――　1986『夜よシンバルをうち鳴らせ』福武文庫。（初出「日本読売新聞」1964–1965 年連載、1967 年に現文社より単行本）。
――　1992『北京飯店旧館にて』筑摩書房。
――　1994『わが北京留恋の記』岩波書店。
――　1954「金史良作品集」『近代文学』 10 月号、61-63 頁。
――　1974「韓国ペンクラブ会長――白鉄氏への手紙」『中央公論』10 月号、285-291 頁。
――　1988「私の朝鮮経験――再説・金史良との夜」『寄留者の歌』1988、リブロポート、240-241 頁。（初出『三千里』14 号 1978 年夏）。
――　2001「遠人近交録（第二話）金史良との一夜」『世界』第 685 号、277-284 頁。
――　1970『在日朝鮮人――七〇年代日本の原点』財界展望新社。

中文文献

金在湧　2014《合作与抵抗――日本帝国主义统治末期之韩国社会与文学》（吴延華、禹尚烈译）社会科学文献出版社。

中文資料

《国民雑誌》1941 年 1 月－1944 年 12 月　北京：国民雑誌社。